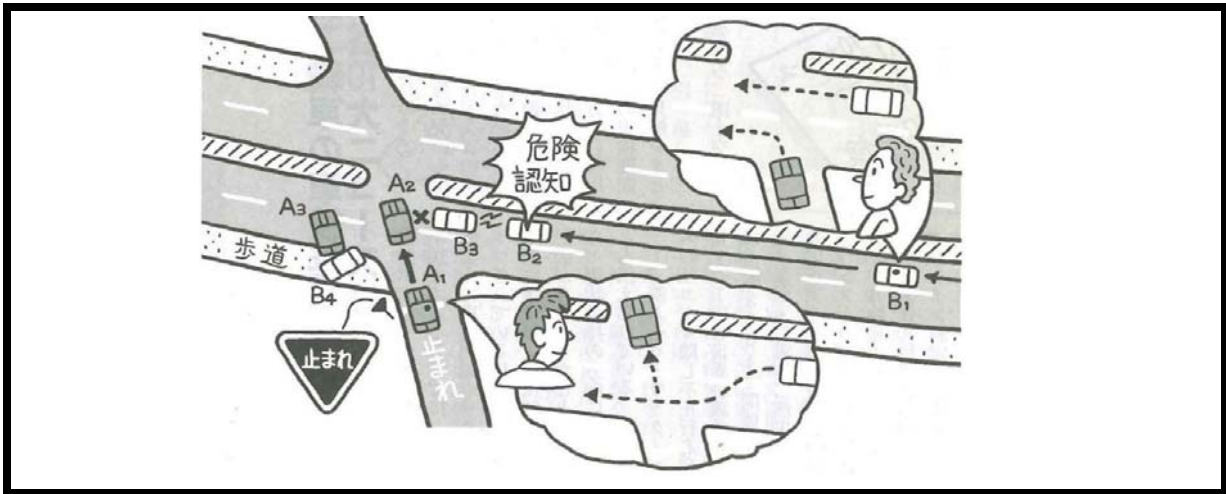


## ■事故の概況



事故類型：出会い頭

発生日時：（雨）

当事者A：普通乗用車 10歳代 男性

当事者B：普通乗用車 30歳代 女性

## ■ 事故の概要

Aは、中央分離帯のある往復4車線の道路を横断しようとして、一時停止の停止線付近で停止して左右を確認すると、右数10m先にB車が第2走行車線を走ってきているのを発見し、「このくらいの距離があれば自分の方が先に行けるだろう、もし行けないとしてもB車は止まるか左側の第1車線に車線変更して自分を行かせてくれるだろう」と考えました。

Bは、数10m先の左側にA車発見しましたが「A車は左折するのだろう。」と考えて、そのまま進行しました。

A車が道路を横断して中央分離帯付近にさしかかった時、第2車線を走行してきたB車は急ブレーキをかけたのですが止まることができず、A車の側面に衝突しました。

## ■ 事故から学ぶ

この事例は、A、Bのだろう運転が大きな要因と思われます。

最近の自動車には、衝突被害軽減ブレーキなどの運転をアシストする機能が装備されていて、それはそれで大変役に立ちますが、最終的には運転者本人が、「こうすると危ない」「これでは事故がおきるかもしれない」という予知・予測をしつつ運転することが事故防止につながります。

この事例のように「自分の方はこうできるだろう。周囲の車はこうするだろう」という自分にとって都合のよいことばかりを考えて運転していると、周囲が自分の予測と異なった行動をとっても、それに適切に対応することができなくなり、事故につながるようになります。